

鹿港民俗文物館・中国信託商業銀行「文薈館」を訪ねて ～辜振甫氏・辜濂松氏を偲ぶ(前編)～

亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員
根橋玲子・藤原弘

中国清朝の時代から日本統治時代を経て、台湾の富豪となった一族として「台湾五大家族」があり、基隆顔家、板橋林家、霧峰林家、鹿港辜家、高雄陳家が台湾の豪族として挙げられている。板橋・林家が最も早く成功し、次に霧峰・林家と高雄・陳家、最後に基隆・顔家と鹿港・辜家が成功を収めたと言われている¹。また、戦後の5大家族として、国泰集団の蔡家、和信集団の辜家、台塑集団の王家、新光集団の呉家、遠東集団の徐家が挙げられているが、このうち鹿港辜家は、台湾五大家族のうち戦後最も事業を成功させた一族と言われており、戦前・戦後を通じた唯一台湾で100年続く栄誉ある家系とみなされ、戦前及び戦後における台湾の近代史やファミリービジネス研究の対象となっている²。

特に、辜家の戦後のビジネスを発展させた辜振甫氏は、台湾で断交前に唯一日本政府から叙勲を受けた日台交流の第一人者である。一方で、海峡交流基金の前理事長としても有名であり、往来が限られていた1980年代から中国政府とのパイプ役として活躍した。2005年2月2日国父記念館で行われた辜振甫氏の追悼式(2005年1月3日逝去)から早くも10年の月日が経とうとしている³。

筆者は、2015年4月及び9月に辜家ゆかりの施設である鹿港民俗文物館と、中国信託商業銀行「文薈館」を訪問し、2005年2月故辜振甫氏の告別式で配布された同氏追想録「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」(辜振甫人生記録)の記述を元に、辜家繁栄の歴史を辿った。折しも、今年(2015年)は辜振甫氏の冥誕100歳⁴となっており、辜公亮文教基金會⁵がその記念行事として、10月9日から三日間、台北市政府「親子劇場」にて、辜振甫氏が愛してやまなかった京劇の演目である「空城計」、「曹操與陳宮」、「鼎盛春秋」などが開催される予定である⁶。

鹿港民俗文物館は、辜家発祥の地である鹿港にある辜顯榮氏の旧居を前身としており、その歴史的な建造物や収蔵物は、今も鹿港にある辜家が管理する私営博物館の中に保存されている。台湾人で初めて戦前の貴族院の委員となった辜顯榮氏の曾祖父にあたる辜禮歡は、1788年英国占領前のマ

¹ 台中にある国史館台湾文献館では、2011年7月1日～9月30日の期間、この台湾五大家族にまつわる歴史的な品々を展示した。

² 川上桃子(2004)『台湾ファミリービジネスによる新事業への参入と所有・経営』星野妙子著「ファミリービジネスの経営と革新」アジア経済研究所・アジアとラテンアメリカ研究双書NO.538

³ 追悼式典では、辜氏の台湾への貢献を称え「褒揚令」が読まれたほか、当時の陳水扁総統のスピーチでは「台湾の社会が最も尊敬した人物」と称された。日本からも政財界50名以上の弔問団が列席し、日華議員懇談会会長平沼赳夫元経済産業大臣、経団連や交流協会会長、日系大手企業役員等が参列した。当時三通がなかった中国側からも、海協会汪会長の代理として、國務院台湾事務弁公室副主任孫亜夫副会長と李亜飛事務局長が列席した。

⁴ 台湾では、特に偉業を成し遂げた故人の誕生日を祝う風習があり、生きていれば〇〇歳というのを、「〇〇歳冥誕」と表し、記念行事等が行われることもある。

⁵ 財団法人辜公亮文教基金會(英語:The Koo Foundation)は、1987年に辜振甫氏(字を公亮という)が立ち上げた基金会であり、台湾や各国の文化交流や企業交流活動、経営管理や医学研究、文芸その他活動を促進することを主旨として設立した。

⁶ 2005年9月3日付中國時報による。1998年の来日公演にて、辜氏は「空城計」で諸葛孔明を演じた。

レー半島で同地の「最も尊敬すべき華人」となっており、英国植民者が、彼に地方住民の行政首脳業務を委託し、英国植民地マレー半島第一キャプテンに任命されたという⁷。辜禮歎の息子の一人であり、辜顯榮氏の祖父にあたる辜安平氏は、清朝に科挙試験を経て進士となり、清朝時代の欽差⁸であった林則徐の下で官僚となったが、その後台湾に移住することとなった。1866年2月2日に辜顯榮氏は鹿港街菜市頭の古い住宅で生まれたが、2歳で父親辜琴が他界し、母親の薛氏が顯榮と双子の兄辜忠を、女手一つで育てたという⁹。

1. 辜顯榮氏と鹿港民俗文物館

鹿港民俗文物館（財団法人彰化県私立鹿港民俗文物館）は、台湾新幹線烏日（台中）駅からタクシーで30分程の彰化県鹿港鎮にある。鹿港はかつて「鹿仔港」として、山がちな台湾中部を外部とつなぐゲートウェイを担っていた。清朝勃興期に鹿港と南部の台南府、北部の艋舺（台北萬華）は台湾の三大港湾都市として挙げられており、「一府、二鹿、三艋舺」¹⁰として、経済、軍事、交通の要となっていた。さらに、17世紀中国清朝の乾隆時代からは、15万の人口を有するこの地では、文化芸術が花開いたという。

清朝中期以降、「鹿港に帆が飛ぶ」と評され商船が密集する港湾であったが、港が徐々に泥で埋まり、水利環境が悪化し海岸へのアクセスが悪くなると、港湾都市としては没落することとなった。一方で、歴史文学の拠点として鹿港文士エリートを輩出したこの地には、歴史的資産と文化的風習が蓄積され、現在の鹿港は台湾の文化と民俗研究の代表的な拠点の一つとなっている。¹¹

同館の敷地には、合計三棟で約800坪を有する建築物があるが、このうちの一棟「古風楼」（C館）は200年の歴史を有する伝統的な閩南¹²風の木造建築物であり、清朝末期から日本統治時代の100年間に亘り、私塾として鹿港文人の教育の場であった。「古風楼」の中には、古い井戸を中心とした小さな庭園が設置されているほか、一部に優雅なたたずまいのバロック式洋風建築があしらわれるなど、伝統とモダンを併せ持った建築物となっている。1919年に鹿港辜家の辜顯榮の居宅として、清朝の建築物と西洋建築を融合した現在の姿が完成したが、当時の鹿港の名士はこの居宅を「大和¹³商行」「大和厝」と呼んでいたという¹⁴。その他の二棟は、1919年落成した3階建て洋館のA館、2階建て台湾式建物のB館となっている。

現在辜家私有の敷地面積約4千坪のこの博物館には、収蔵品が6,000点以上あると言われており、辜顯榮氏の後継者である辜振甫氏が私的に所有していた家具や食器、書画や文献、服装装飾品、戯曲楽器、各種儀式関連品や骨董などの文化資産が寄贈されている。その他、鹿港の名士より寄贈された個人の収集品も一部展示されている。ここには、清朝中期から日本統治期までの鹿港に暮らす

⁷ 「桃源儒林辜氏宗譜源流序（辜家源流史）」（清朝乾隆帝時代1766年に14世代の子孫の記録をまとめ、1840年に15世代の孫にあたる朝鶴によって記録された古書）によれば、辜氏の系譜は、唐太宗の貞観8年（紀元634年）の進士であり江西観察使に任命された林正公に遡るといふ。環境弾劾による投獄等苦難の時期を経て辛苦の徳を積み、林正公は辜（上古下辛という二つの文字を合わせた漢字）と改正、彼は辜家の始祖となったという。

⁸ 皇帝の全権委任を得て対処する臨時の官

⁹ 辜顯榮氏誕生翌年1867年、日本では明治天皇が即位、徳川慶喜の「大政奉還」により、政権は天皇に復歸し、百八十年以上続いた江戸幕府時代は終息、奇しくも辜顯榮氏の父が他界したのは明治維新の年であった。

¹⁰ 黄天才（2005）によれば、これは200年以上前から台湾にある諺であり、鹿港の地名の由来は、この地に鹿が群生していたことからつけられたという。

¹¹ 黄天才、黄肇行（2005）「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」

¹² 中国福建省に多く存在する漢民族の一つであり、台湾人のルーツと言われている。

¹³ 「勁寒梅花」によれば、「大和」は辜顯榮氏の貿易会社の名前であったという。

¹⁴ 財団法人彰化県私立鹿港民俗文物館ウェブサイトによる。

人々の伝統的な生活様式や当時の貴重な資料が多数残っている。

A館1階が博物館の入り口となっており、入って左側の1室は特別展覧室として約二百年前の鹿港市街の模型や鹿港龍山寺観音の石像が設置されている。また右側の2室～7室には、清朝時代の詔勅や科挙試験問題や回答、階級が表示された官服、貴婦人の身の回り品、有名人の書画等歴史的に貴重な品々が展示されている。同館2階には会議室があり、当時の名士の中国画や書画等が掲示されている。三階は、貴賓招待用の大広間や会議室などがあり、応接に使われたテーブルや大理石の椅子、メインベッドルーム等が配置されており、当時の豪商の暮らしぶりが分かる日用品などが多数設置されている。B館は鹿港にまつわる資料室となっており、日本統治時代の調剤薬局も再現されている。C館1階は、図書館兼作品展示室があり、主に新郎新婦や使用人が使っていたと思われる当時の生活用品が多数展示されている。2階は、書齋や隠居部屋、赤ちゃんの世話をする部屋など、当時の生活ぶりが再現されたつくりとなっている。

1973年8月10日より、辜振甫氏実弟の辜偉甫初代理事長を中心に鹿港民俗文物館が設立された。1982年の辜偉甫理事長逝去により、一時鹿港名士の黄奕鎮氏、許志錕氏が館長を務めていたが、1985年に辜振甫氏が第5期理事長に就任し、第10期(1985～2003)まで再任で理事長を務めることとなった。また、2003年には辜濂松氏が第11期理事長に就任、理事も14名に増えた。2006年に辜寬敏氏が第12期理事長に就任、2009年には第13期理事長にも再任され、理事も15名となった。2012年6月より現在に至っては、第14期理事長辜嚴倬雲女史(辜振甫夫人)と、第14期館長辜懷群女史によって運営されている。

幼少時の辜顯榮氏は、冒険心のあるリーダーシップを持った少年であり、8歳の時には清朝の



写真1 鹿港民俗文物館

進士である黄玉書氏から漢学と書道を学んだ。彼の志はビジネスをやることであったため、21歳で福州、上海などの地へ渡り、貿易に従事した。日本統治時代に基隆区街庄庁事務所書記、基隆街助役等の要職を歴任した許梓桑氏は、辜顯榮氏の良き理解者の一人であり、清朝が台湾を分譲する以前の辜顯榮氏は真面目に働き、飾り気がなく朴訥であり、神を敬う商人であったという。許梓桑氏が晩年に纏めた記念文書では、「辜個人は必ず後世に名を残す」と述べており、「辜顯榮氏と知り合ったのは、日本統治前の1891年～1982年頃、当時辜顯榮氏は26歳か27歳で、武器を装備したジャンクで砂糖、豆、黄麻などを鹿港、基隆に運んでいたが、基隆では必ず許家に挨拶をしたため、許氏の母親には「知識人の心得あり」と信頼されていた」と記述されている¹⁵。また辜顯榮氏は信仰心も篤く、基隆では必ず景安宮を参拝しており、

¹⁵ 1890年、日本では「帝国憲法」公布により、最初の国民選挙が実施され、国会が創設。議会政治が始まった。その後、1904年に日露戦争が中国東北地区で勃発し、日本は世界の強国となった。

日本軍への開場の前にも景安宮へ出向き、神に祈ったという。

1894年に中日甲午戦争が勃発し、1895年から50年の長きにわたり、台湾は日本の植民地として統治を受けることとなった。当時辜顕栄氏は29歳であったが、信心深い辜氏は人より優れた勇気を得て、台湾の歴史の大きな変化に立ち向かった。この大きな決断は、辜氏の運命を変えただけでなく、辜家が三世代にわたり繁栄したきっかけとなった。

1895年に清朝は下関条約を締結し、台湾および澎湖島を日本に分譲した。清朝李鴻章の息子李経方が、日本総督樺山資紀氏と基隆富角の海上で会見し、樺山総督は日本軍を引率して台湾の接收を行うこととなった。台湾巡撫の唐景松は逃亡し、混乱した台北市内では逃亡兵と暴徒による放火や略奪が相次いだ。そのため、台湾の地方名士が代表選出を決議し、事前に基隆に向かい、日本軍と日本軍の入城による秩序回復について協議することになった。しかし、誰も敢えて前面に出てこの問題に取り組もうとしなかったという¹⁶。

辜顕栄氏は事が急であることを知り、辜顕栄氏は単独で基隆へいき、日本総督樺山氏に謁見、乱の鎮圧を要請した。これを受けて、日本軍が鎮圧を実行することとなったが、辜氏は日本軍入城に際し、良く交渉して治安を維持し、流血を避ける措置をとった。1895年6月7日早朝、日本軍は現在の台北市北門に到達し、台北府が開城され、理を以て軍民の政治を取り仕切った。

辜顕栄氏は日本統治時代に日本人と結婚しており、日本政府からは貴族員議員に任命されている。そのため、一般的に「日本びいき」とされているが、最も象徴的な事実として、辜顕栄氏は強烈な中華民族意識を有しており、「身は台湾にあれども、心は故郷にある」と言って、生涯日本語を勉強しなかったという¹⁷。また、日本統治時代においても、日本名に改姓せず、日本統治下で

多くの規制と禁止事項があったにも拘わらず、孔子や孟子の儒学を尊び、中国の伝統的芸術を重視したという¹⁸。そのため、日本総督府の官僚としばしば衝突し、一時母親の介護のため故郷に戻った。1898年11月に民政長官となった後藤新平氏が略奪式の植民地経営を放棄する決意を表明したことを知り、一時故郷に引退していた辜顕栄氏が後藤氏の要請を受け入れて復帰し、荒地の開墾、灌漑、製塩や甘蔗・パイナップル・茶など農産品の耕作改良の先陣を切るなど、日本統治時代の功績を認められ、台湾人初の貴族院委員となった。

1937年12月9日辜顕栄氏は、東京での宿泊地にて、享年72歳で逝去した。辜氏が日本の参議院会議に出席した帰りであったという。同年7月7日に盧溝橋事変が発生し、中日戦争が勃発した。その後、日本統治下の台湾は「戦時体制」に突入していくことになる。

¹⁶ 台南の詩人連横（號雅堂）の「台湾通史」によれば、台湾の名士である林維源、林朝棟、邱逢甲が、艦艀紳士の李秉鈞、呉聯元、陳舜臣等と弾圧を協議したが、台湾巡撫の唐景崧がドイツの商船に乗って四川省滬尾に逃亡、台北内の混乱を制御することができなかったため、大稻埕の李春生を中心に、台湾の秩序維持・管理の議論が行われた。煙台の交換条約締結では、「台湾全島及び澎湖諸島のそれぞれの通商の窓口は府、廳の城塞のなかにあり、軍の倉庫及び公共事業はすべて日本に分譲する。」と決定されたため、下記3つの結論が出た。①清朝の台湾割譲による官僚の逃亡、軍隊の敗走が混乱を生み、台湾の平民としては公権力によるコントロールが不可欠であること。②日本軍は侵略ではなく条約により台湾接收を行うことになるが、清朝はすでに台湾を放棄し、人民に配慮していないため、主権を有する日本の軍隊が治安維持の責任を負うことになること。③代表を派遣して基隆へいき日本軍に徹底した鎮圧を申請するよりほかに手だてではないこと。議論の結果、日本軍に鎮撫を求めることになったが、日本軍との交渉には誰も行くものがいなかったという。辜顕栄氏は「行こうとする人がいなかったのも、私は一人で基隆へ行き、途中で米国籍記者 Davidson とドイツ籍記者 Holy に出会ったが、日本軍に対して、台北の混乱ぶりを説明することはやるべきではないと言われた。」と述べている。

同館の出版物は1975年芸術家編集委員会編集「鹿港民俗文物館特集」、1985年当館編集委員会編「中華民俗文物」、2013年11月施明発主編「鹿港民俗文物館記念インタビュー」の計3冊である。2013年11月8日～10日には、各界の関係者を招いて、「鹿港民俗文物館開館40周年記念」イベントが行われた。



写真2 中華民俗文物館資料及び40周年記念出版物

2. 中国信託商業銀行・文薈館

中国信託商業銀行の信義区から南港への移転に伴い、2014年12月2日に、150億台湾元を費やし5年かけて造成した中国信託金融園區が開幕した¹⁹。中国信託金融園區にある「文薈館」の、中信金控の創業者である辜振甫・辜濂松紀念區には、

台湾で唯一の3D映像技術を駆使して辜濂松氏の姿を再現した展示などがある。中国信託商業銀行は、前董事長である辜振甫氏が創業した48年前には社員19名であったが、現在グローバル採用を含め15,000人の社員がおり、台湾では147支店、海外では100営業拠点を有する。

總統府資政、海峡交流基金会董事長を務めた辜振甫氏は、80歳まで活躍し、中国の伝統的な家庭観を有する辜家の長男として、中国の知識人に引けを取らない教育を受けていた。一方で、気宇壮大な度量を有しており、同僚に対しても、「謙虚であり穏やかであり、誠意を以て信頼関係を構築」し激励した。こうした儒家の修身と徳を高める誠意を持つ辜氏の風格と、辜汪会談における交渉姿勢から、中国の知識人がこぞって彼を尊敬し、尊

¹⁷ 台湾の作家葉榮鐘氏は自著である「紀辜耀翁」で、「彼の成功は偶然では決してない。日本語を話せず、日本語を読めない彼が、日本の高官や豪商と対等に交渉し、しかも日本人の保護と尊敬を獲得した。これは彼の胆力と知恵によるものだと確信している。」と述べている。また、辜顯榮氏を「古いタイプの英雄豪傑である。」とし、血縁観念、郷土観念、古い情緒を大切にし、「彼が使う人員は、十中八九彼と血縁関係のあるもので、彼は鹿港出身の人物に関しては、面識があるないに拘わらず、三分の好意を抱いていた。従って台北の大和行は中部人士の招待所となり、頻繁に鹿港人が宿泊した。彼はどんな時でも恩恵を受けた人にはほぼ完全に報いるように、十分なお返しをした。また、金持ちで傲慢な人の態度をとることもなく、礼儀を守り恭しく対応した。」と表現した。

¹⁸ 辜振甫氏80歳誕生日に出版された「学而第一（学ぶことが第一）」の序文には、父親辜顯榮氏はいつも「お前たちは日本人の統治下にあるが、黄帝の後のことを考えて、自分を大切にすることを忘れないように」と子供、孫たちを教育したと記述されている。実際に、辜顯榮氏は、孔子を大変尊敬しており、晩年は台北の孔廟再建に全力を尽くしたという。

¹⁹ 開幕式には多くの貴賓が参加し、中信銀行副董事長陳國世、董事長童兆勤、中信慈善基金会董事長辜仲諒、中信金控創辦人辜濂松夫人辜林瑞慧、中信金控最高顧問江丙坤のほか、金管會主委曾銘宗、艾森豪獎金中華民國協會董事長許水徳、中信金控董事長顏文隆、前總統李登輝、前總統府資政辜寬敏、中国信託創辦人暨榮譽董事長辜振甫夫人辜嚴倬雲、中信金控副董事長薛香川、中信銀行最高經營顧問廖了以、民進黨立法院黨團總召集人柯建銘、中信創投董事長王志剛、中信銀行國際事務最高顧問馮寄台も参加した。また、中国信託金融園區にある「文薈館」前總統である李登輝氏、中信慈善基金会董事長辜仲諒氏などが「文薈館」を見学した。



写真3 中国信託金融園區「文薈館」

重した。

* 本稿は、黄天才、黄肇行（2005）「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」（聯經出版公司発行）を藤原が日本語に翻訳し、その事実関係を整理した資料を基に主に根橋が執筆しており、本原稿中の誤訳や事実関係の誤認については、執筆者の責に帰属するものとする。本原稿執筆に当たっては、中国信託金融ホールディング最高顧問

／東京スター銀行会長江丙坤氏、黄章富副総経理、及び中華經濟研究院顧問の辜晏宏氏に多大なご協力とご知見をお借りした。また今回の調査にご同行頂いた、台中東海大学劉仁傑教授、新潟大学経済学部岸保行准教授、法政大学グローバル教養学部福岡賢昌准教授及び我々のグループの調査事業に関係、共同研究助成を頂いた公益財団法人交流協会に心より感謝を申し上げたい。



写真4 辜振甫氏胸像（文薈館にて）



写真5 辜振甫氏・霽濂松氏若き日の写真（文薈館にて）